せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42－2590
第121号・平成11年10月1日

# 年表で読む古平の歴史

《29》

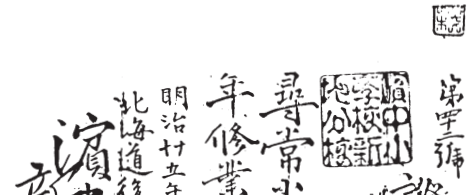
## ■新地小学校開校

先月、沢江学校が開校してから、本校に統合されるまでの二十三年の歴史を書きましたが、引き続いて、沢江学校から六年遅れて開校した、新地小学校について見てみましょう。

明治二十年（一八八七）十月六日、その当時のモダンな校舎としても知られた浜中小学校が、原因不明の火災で全焼してしまいました。新地方面からも児童が通学していましたので、これを機会に新地小学校を創立することになり、明治二十一年三月二十三日、新地町六番地（現在の新地町・吉田商店裏の高台）にあった、古平警察分署跡の建物を使用して開校しました。

しかし、建物も古く狭かったので、翌明治二十二年十月、ほぼ同じ場所に校舎を新築しました。大正七年刊行の『古平町沿革誌』に、「翌二十二年十月、新地小学校建築成ル」と書かれていますが、坪数や費用などは分かっていません。

学校ができると近道として、現在も道路になっている吉田商店と藤沢商店の間を通るようになりましたが、ここは当時、醸造業と雑貨商を営んでいた泉商店の敷地でした。倉庫への通路でしたが、「学校へ行く子どもが通るのなら――」と、自費で道路を整備し、通学路として使われるようになりましたが、それ以来、学校が無くなってからも一般の道路として利用されていました。



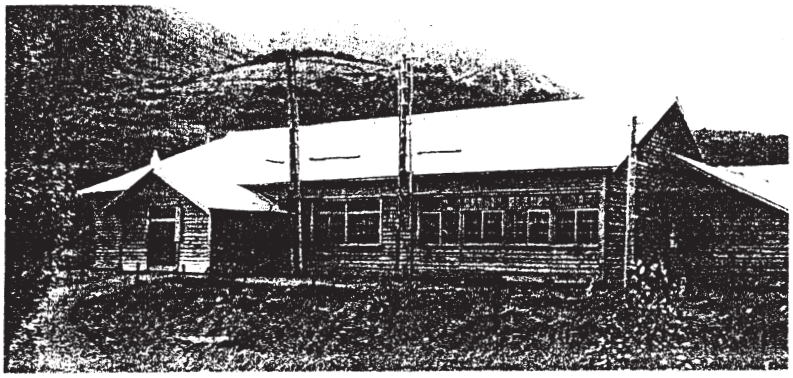

当時、郡内には浜中・新地・群来・沢江・沖の五つの小学校がありましたが、明治二十四年十月、浜中小学校が新築されると再編成され、浜中小学校を浜中尋常小学校と改称し、ほかの四校はその分校となりました。

その後、新地分校は隣家からの火災で全焼しましたが、丸山山麓の現在の《ふるびら温泉》の場所に新築されました。

敷地は町内の資産家からの寄付によりましたが、特に初代・藤沢勇蔵は千四百坪余りの土地を寄付し、新地分教場の玄関正面にその肖像画が掲示されていました。

大正末には群来分校を統合して、一時は五学級・児童数三百五十人を数える全道一の分教場となりました。

そして、昭和三十八年四月一日、古平小学校の新築で統合となり、七十五年におよぶ歴史を終えました。



＜昭和十年ころの新地分教場＞

## 大正六年

1／9　夜、例の撞球場へ行く、㊥、㊅、和尚さんらがいる。一円四〇銭の回数券を買った。

1／10　甲寅会の決算も近いので帳簿調べをする。利子二一〇円ほどあがる。現在高は一、三八五円あり、満三年になる。

1／12　カレ網大漁、二百貫（七五〇キロ）獲ったところもある。本陣の浜では人夫が出て矢来（やらい）、その他の工事をしている。

1／13　カレ網大々漁、四百貫も獲った人が沢山いるという話だ。

1／14　マス刺網で六〇本から七〇本、カレ網で二百貫～三百貫の漁。マスが獲れているので、ガンズ網の問い合わせが沢山ある。

1／21　甲寅会を退会するという人がいて、その後を困で引き受けるという。一株四八円で、払い込みは三六円なので一二円の利益になる。

1／24　ひどい寒さで、十時ころからにわかに大吹雪。一時ころには先も見えないようになり、店の板戸を閉めても中まで白くなる。こんな吹雪も珍しい。越中屋から電話があり、学校へひさちゃんを迎えに行けないので、迎えに行って家に泊めてくれとのこと。学校へ行っている子どもの家では大騒ぎ。富丸は乗客を乗せたまま避難しているという。

## 高野名幸作さんの日記から

### 北海の荒海を乗り越える

【22】

晩の十時ころになり、ようやく静かになった。

1／25　古平では出漁した漁船がいなかったのでよかったが、美国・余市・湯内などでは、合わせて七〇人から八〇人の死者が出る大惨事になったという。

1／26　一昨日の大吹雪、古平ではさわりは無かったが、新聞では余市二〇余名、湯内四一名、美国五〇余名、岩内二〇余名の溺死者があったという。実に近年まれな大惨事である。新地・みどりで公友会の総会があり、二六名が出席した。

1／27　吹雪の大惨事のことが新聞に出ている。それによると余市二一名、湯内四二名美国四五名、忍路ほかで百余名の溺死者という。義援金の募集でもあれば、真っ先に寄付しなければならない。

1／29　昨晩から天気になった。カレ網漁も久しぶりに出た。店の方は積丹方面から刺網買いの客で忙しい。今夜、加〇（二茶屋）さんで六時から四二歳の初老祝いがあり、招待されて行く。客は△主人、小林さん、与平さん、㊥さん、「ヨばあさんなどで、ご馳走があり一二時ころ帰る、

2／4　小樽に滞在する。一時ころ余市・甲谷に着く。富丸がまだ古平から来ていないので、甲谷で待つことにした。二時ころようやく富丸が着いたが、生魚二百貫余りの積み込みに荷役がはかどらず、四時ころになってようやく船に乗り込む。この日、富丸は皇后陛下の御真影（写真）が古平・美国・積丹の三郡へ下賜されたのを運ぶので、船は満艦飾、かなり波があったが六時ころ本陣の浜に着いた。

2／8　ひどい吹雪になり板戸も閉めた。この吹雪の中、本間権平さんから六百間ほど網を買いに来た。聞けば、函館に注文した網が不出来で困ったとのこと。現物を見ないとこうゆうこともある。夕方から吹雪も止んだ。入船町の㋑山口さんの娘さんが、四、五日寝ただけで亡くなったとのこと。二六歳とか、気の毒なことだ。父が通夜に行く。

2／15　今日は青空で珍しいほどの快晴、カレ網もみんな出た。富丸、古英丸もそろって入港した。

═══ 続く ═══

断章小説【ふるさと遥か】四

# 阿修羅の海

土口川　義雄

列線に並べられた零戦(ゼロせん)は、もう轟(ごうごう)とプロペラを回転させて、出撃態勢をとっていた。二百五十キロ爆弾の着装も済んでいる。

通常なら、今着けている爆弾の代わりにそこには増槽タンクがつけられ、長距離飛行に備えるものであり、胴体や翼の本来の燃料は最後に使用するもので、途中、敵機と遭遇したときはただちに切り離して、身軽になって戦闘ができるようになっていた。

しかし、今は違っていた。始めから帰還などできぬ必死の姿であり、無謀極まる自殺行の特別攻撃隊の出発であった。

いったい、誰がこんなバカげたことを考えたのか。江田島や習志野で飼いならされ、日本を神国と思わされ、「武士道とは死ぬことと覚えたり」とか、「八紘一宇(はっこういちう)」とか、次々に都合のよい言葉を羅列して若者をたぶらかし続け、ひと握りの職業軍人たちが、敗戦に次ぐ敗戦で最後のカケにでた狂気の所産であったのだ。

皇道派だ、統制派だと上層の軍人が権力争いを続け、いずれの派も天皇を「神」にまで押しあげて権威を借り、純真な若い軍人を好きにように動かしていたのである。

いずれの国でも、軍人が政治に参画したときはロクなことがない。いかなる理由をつけようとも戦争は罪悪である。

哀れなのは国民である。当初、心ある学者や知識人の中からも、一部の勇気ある宗教団体も敢然と反戦行動をとった。しかし軍部権力の野獣のような襲撃の前に、ひとたまりもなく消えた。

目のあたりにそれを見せつけられた、マスコミも学者も宗教者も、ただひたすら「非国民」のレッテルから逃れるために、伊勢神宮の神札の前にぬかづいた。

自分の本音を言うことをみんな避け続けた。悪魔の閃光と、紅蓮(ぐれん)地獄の火柱が、広島と長崎の空高くそびえ立つまでは・・・。

零戦は、一機また一機と飛び立って行った。隊長機を先頭にして編隊を組んだ六機は、帽子を振って見送る仲間たちの上空に来たとき、一斉に翼を左右に振ってバンクし、最後の別れのあいさつをし、北の空にたちまち溶け込んで消えた。

彼がこの基地に着任して間もなく、思いがけず平田の姿を見つけて驚いた。海兵団入隊時、彼らはいっしょで仲良しであった。当然、二人とも一兵卒であったが、今見る平田は将校に姿を変えパイロットになっていた。

寡黙の平田は、自分のことをあまり語ろうとしなかったが、大学に籍を置いていたのに、すぐ将校になる学徒出陣の恩恵に背を向けて、彼と同じ召集兵として入隊していたのが不思議であった。彼と平田は、松山航空隊で別れ別れになった。

士官と兵は、昔通りの言葉で飛行場のはずれで語り合った。

内地で一度、彼らは同じ任地に転勤したことがあった。任地は遠く、着任まで時間の余裕があった。

「おい、東京でちょっと俺に付き合ってくれんか。」

平田が彼を連れて行った先はかれの婚約者の家であった。

小さな神社の宮司の娘で、わずかしかない時間だというのに、彼らはもの静かな口調で語り、別れのときはすぐにやってきた。

沖縄の海は燃えていた。慶良間(けらま)の島々と、那覇・糸満の海峡に密集している艦船から無数の火線が弾幕を張り、次々と突っ込んで行く零戦を火だるま

⇦（次ページ下段へ続く）

# 遥かなる故郷の思い出
# わが闘病生活 ⑨

[59]

楊　義　春

【脳梗塞】

失語症で落ちこんでいる彼に、ちょうど、それについての記事があったので、彼に「読むか？」と聞いたところ、「読みたい」と言う。

彼は「失語症の言語治療」と、「リハビリ」の項を繰り返し読んでいたようだった。あとで彼と話してわかったことだが、脳梗塞とはどんな病気かわからなかったらしい。

失語症もリハビリで回復の希望を見え出したのか、彼の態度も明るくなったように感じられた。それから四日後に彼は退院した。その後、外来患者として通院し、「リハビリに励むよ」と言っていた。

奥さんが迎えに来て、私のところに手土産を置いて行ったが、最初は消極的であった彼が本格的にリハビリに取り組むようになったので、それが奥さんにとってよほどうれしかったらしく、何度も何度もお礼を言って帰って行かれた。

八月十八日（日）

今日は日曜日なので検査は一切なし。午後になって家内と娘が面会に来たが、帰った後、夜八時ころ急に心臓の動きが激しくなり、息苦しくなった。ナースセンターでも感知したらしく、当直の先生二人と看護婦さん二人が、脚立のような大きな機械を車に積んでとんで来た。なんという機械なのかわからない。先生が、

「橘さんの心臓が、いま大暴れしています。もう少しの辛抱ですから、安心してください。」

と言って左腕に注射をしてくれたが、なかなか治まらない。こんなに心臓が激しく動くなんて今までなかったことだ。

しばらくして、注射が効いてきたらしく楽になった。

今日は休日なのに、先生も看護婦さんもご苦労さまでした。

八月十九日（月）

午前中にまたまた、きのう同様に心臓の動きが早くなり、先生と看護婦さんが駆けつけてくれる。今度も注射で治まる。

今日は、午後から頸部のエコー検査、CT検査、眼科検査と三回も検査があった。

八月二十日（火）

午後、胸部レントゲン（肥大検査）、小便袋を外す。今日で入院七日目になり、病院の生活にも大分なれてきた。主治医の岡部先生、女医の堀先生の二人とも研究に熱心な先生であることがわかってきた。

岡部先生は私が永年、日記をつけていたことに関心があるようで、脳梗塞の発作までにどのような前ぶれの兆候があったか、そんなことを知りたかったらしく、また、医師として今後の治療に役立てたいので、ぜひ見せてください、と言われた。

私の日記の内容はプライベートなことが多いので、と一時はお断りしたが、お世話になっている先生のことなので、それに、私の日記が少しでもお役に立てばと思い、脳梗塞になるまでの参考になるような体の不調や、失神のときの様子、脳梗塞の前ぶれではないかと思われるようなことなどを、こと細かく、事務用の便箋三枚に書いてお渡ししたところ、先生は大変喜んでくれた。

こんなこともあって、主治医の岡部先生、堀先生とは特別親しくなった。

――続く――

⇦（前ページより）

まにした。

「母ァさァんッ……。」

叫びながら、平田は阿修羅（あしゅら）となって弾幕の中に突っ込んで行った。

＜この稿終わり＞

# 東岩瀬村 北前船 伊勢丸をめぐって

古平

☆いかりを下ろす北前船

『せたかむい』に七、八回にわたって原稿を寄せてくださった高橋藤藏さんから、積丹の澗に停泊している北前船のコピーが送られて来ました。この写真は最近、新聞社から発行された本に載っているもので、発売後すぐに注文して持っていたのですが、ついそのままにしていました。

高橋さんからのコピーで思い出し、今度は早速、積丹町老人クラブの会長をしておられて、いつも資料を送っていただいている梅野彦三郎さんに、この写真に写っている海岸はどこなのかお聞きしました。

それによると、来岸町近くの海岸ではないか？　ということでした。

現在の来岸町は早くから開けた町で、運上屋出張所があり、安政三年（一八五六）、神威神社が建てられています。学校も、美国（小泊）についで翌年の明治九年に開校し、自然の澗に恵まれて鰊漁で大いに繁栄しました。

ところでこの写真の船ですが、その後のことについて調べてみますと古平との関係も分かってきました。

☆伊勢丸の遭難

この北前船は《伊勢丸》といい、当時の東岩瀬村（現在は富山市岩瀬町）米田元次郎の持ち船でしたが、建造されたのがいつかはわかりません。石数は七二一石ですが、このくらいの大きさだと米を千石（一五〇トン）くらい積むので、土地では千石船といっていたようです。

伊勢丸は大正七年九月、この年二度目の北海道からの帰り台風に遭って秋田沖で遭難し、乗組員一一人全員が溺死してしまいました。

伊勢丸の船体の漂流物は十月三日、北海道の瀬棚村・太櫓村辺りで見つかり、伊勢丸が積んでいた伝馬船には、綱で体をしばりつけた一人の死体も上がったそうです。

☆古平との物資の輸送

伊勢丸の、本州から古平への積み荷や、古平からの帰りの積み荷が何であったか、また、その取扱い業者が記録に残っています。

▼大正七年八月

下り（本州 ⬇ 北海道）

古平港入舟町　今井平五郎

白米（三等）　八四俵

干むしろ　四一三束

かます　一二〇枚

大倉なわ　二一五丸

その他　わら工品など

合計　五、五八三円

古平港　小石勇吉仲買店

干むしろ　二〇九束

かます　一六五枚

大倉なわ　一〇丸

その他　越中白米など

合計　九〇一円

（合計金額は銭以下切り捨て）

ほかに小樽港の分二件

▼大正七年五月

上り（北海道 ⬇ 本州）

古平港入舟町　今井平五郎

羽鰊　一、〇〇〇束

笹目　二〇俵

鰹〆粕　三〇俵

古平港　小石勇吉仲買店

*羽鰊　三、八一八束

身欠鰊　一五本

笹目　一本

※鰊製品の規格と単価

羽鰊一束（二貫）　一円一〇銭

笹目一俵（三〇貫入）一四円七〇銭

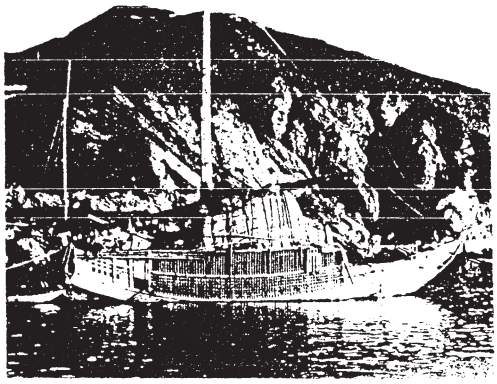
身欠鰊一本　一三円二〇銭

一〇〇尾＝一把、二四把＝一本

俵に詰めたものは建一本

*羽鰊＝胴鰊（身欠を取った残りの身と骨の部分で肥料用）

北前船はこのほか、あらゆる雑貨や日用品などを積んで日本海を航行し、物流と同時に文化の担い手でもありました。



# 古平の名勝地

## 霊場　観音滝ものがたり

（3）

▽泥の木川の滝

ある時、岳轉和尚は泥の木川の上流に大きな滝があり、また、そこは景色もよいところだということを聞き、案内する人があってその場所を訪ねましたことがありました。

稲倉石や六志内方面へ向かう道路から、泥の木川に沿って上流へ上ること約二キロ、その滝の見える場所まで行ってみて、和尚はその静寂さと、山に囲まれた自然の渓谷の美しさに感嘆しました。

そして、この滝から流れる泥の木川の水が、下流に広がる泥の木・鴨居木方面の広大な水田を潤す灌漑水（かんがいすい）であることを知り、なおのこと泥の木川への思いを深くしました。

▽霊場の建設

大正十二年一月二十六日、ときの摂政裕仁殿下（後の昭和天皇）と、久邇宮良子親王のご婚儀があったことから、岳轉和尚は祝賀を記念し、これを機会に泥の木川上流の滝の見える一帯を霊場として、ここに観世音を祀ることを思い立ちました。

春になり、祝聖会の例会で岳轉和尚は、自分が見てきた泥の木川上流にある滝と、その周辺の優れた景観について語り、信仰の場として霊場の建設についての計画を提案しました。

祝聖会の会員は、日ごろから月二回の例会日には、仏教の信仰を中心として自分たちの修養に努めてきたことから、この滝を中心とした霊場の建設には大賛成で、岳轉和尚の計画に耳を傾けたのです。

観世音を祀ることになったのは、丸山中腹に観音像が一体祀られていて、そこにお堂を建て

※（次ページ三段目へ続く）

## 川柳

しばらく病気療養されておりました北さんが、元気で退院され、また、川柳に取り組まれることになりました。先月原稿をいただきましたが、すでに発行した後でした。せっかくの労作ですので、今月分と併せて掲載しました。

石井愛子

眠ったら昔がここにあれば良い
歩み行く皺もあゆみの中にある
敬老会何時までのこせし吾が姿

渡辺ハツエ

恙（つつが）なく喜寿を迎えた幸を知る
物忘れ歯止めの利かぬ老いの坂

北政道

交際費重いが軽い貯金帳
セパ共に決戦続く秋の陣
五体みな介護の中でもがくだけ
政権を狙う舌戦また続く
介護など言葉が重い貧の中
改憲の火柱上がる政治劇
独立を邪魔する戦火続く国
米をとぐ男やもめの背の孤独
自自公に抵抗してる民主主義
灯油の値上がる噂と不況風

# 敬老会にむかしをしのぶ

渡辺ハツエ

今年、三回目の『敬老会』のお招きをいただきました。恙(つつが)なく喜寿を迎えることもできて、私にとってうれしい限りです。

好天にも恵まれて、送迎バスで出席いたしました。広い会場にはたくさんの方が来ており、元気に、和気あいあいとして、町主催の心ずくしのおもてなしをいただきまして、大変うれしく、感謝いたしております。

町長さんからは、お祝いのメッセージと記念品をいただきありがとうございました。これからも健康に留意して、周りの皆様に迷惑をかけないように心がけ、楽しく、元気に余生を送りたいものと思っております。

また、入船町内会長さんをはじめ、山田水産と大島水産社長様、祝賀協賛店の皆様、㈲吉田商店様、藤野覚様とたくさんの方々からのお祝いのメッセージ、ありがとうございました。

かえるみると、亡夫が健在だったころ、『敬老の日』に役場からいただいたお祝いの紅白まんじゅうを、孫には珍しいと思って送ってやることにしました。それからは、ほかのお菓子などといっしょに送り続けて数年になります。

ある時、「私もいただけるようになったら、二人分送れるようになるね。」と言うと、

「そうだな。二人分送ってやったら孫たちも喜ぶべ。したけど、おれたち年寄りになるの待ってるようなもんだぞ。」

と笑っていましたが、私と年齢が一回り違う主人は、そんなささやかな願いもかなえることができずに、あの世へと旅立って行ってしまいました。

※（前ページ下段から続く）

る計画があったことから、町の南北に、相対して観世音を祀ることがいっそう信仰を広めることになるとの考えから、ここにも観世音を祀ることにした、ということが伝えられています。

しかし、霊場建設にはいくつもの難問がひかえていました。まず滝周辺の用地の取得と、本通りから滝までの道路用地の確保と整備でした。

また、どの程度の人たちがこれに賛成し、観音像の設置に協力してくれるのか、そして、その資金調達など解決しなければなりませんでした。

祝聖会員には町の有志が多かったことから、その計画は割と順調に進んだようでした。

＜禅源寺本堂前に建っている西国三十三所第一番観音像＞

来年、私が元気でいてお祝をいただけたら、今度は、亡夫の霊前にお供えしようと思っております。

孫も姉が中学三年生、弟が小学校六年生と成長して、私の話も理解してくれるようになりました。孫たちも、

「いつでも困ったことがあれば、仏様になったおじいちゃんが助けてくれるんだと、言っています。」

と、いつか母親が私にそう教えてくれたことがありました。

亡夫は、孫たちにとっても掛け替えのない存在だったようです。

来年の『敬老会』のお招きを楽しみにしております。

―― 終わり ――

# 古平ホトトギス会

芋南瓜食べた戦時も遠くなり　斉藤波留

夏痩せて指輪もいつか抜ける程　山口悦子

赤トンボ指先に来て構えをり　越野敏雄

新涼の風の入り来る窓となる　大和田絵伊

消灯の退屈となる秋夜長　福井幸平

夏休み見上る孫の目の高さ　仲谷美砂

点滴を飯にウロチョロ暑にも堪え　大島喜恵

風の色透きとおるそら赤トンボ　関口勝志

ちぎれ雲流れゆきしよ秋の海　よしざきり

療養を孫添えくれし盆の月　山口浪

東京の猛暑を越せし蝦夷の夏　仲谷比呂子

上流へ溯上の鮭となりにけり　越野清治

赤とんぼ園児の頭動かざる　室谷比呂子

× × × × ×

# 古平町岬短歌会九月詠草

春咲きのパンジーの移植してをりぬ白と紫と名札をたてて　東美知

桝もちて米量る媼ら楽しさう話をしてはやり直しして　鈴木時子

病むひざを杖にすがりてかばひつつ歩む菜園に韮の花咲く　竹内コト

堤防に垂るる南瓜の葉の枯れて実のつく見ゆる静かな浜に　堀典子

知らぬ間に良き施設に入りし長崎さんたのしくゐますやしばしば思ふ　奥山きよみ

試歩をゆく土手みち親し炎天を虎杖垂れて深き影なす　池田テル

隣家のキャベツ畑は秋の陽に紋白蝶のむれて乱舞す　丹後初江

街灯のオレンヂ色が浮きあがる夜半の雨あがりし後に　田中香苗

明近き空に明星一つあり漁に出てゆく船の灯に近く　山口スヱ